

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02483

研究課題名(和文)九州北部方言における母音融合の実態調査と分析

研究課題名(英文)The analysis of vowel coalescence in northern part of Kyushu

研究代表者

小野 浩司(Ono, Koji)

佐賀大学・教育学部・教授

研究者番号：80177261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は北部九州方言に観察される母音融合の特殊性を標準語との比較によって明らかにすることである。ただし、この目的を達成するためには、まず母音融合とはいかなる現象であるか、また、母音融合を説明するための分析法としてどのようなものが理想的であるかを見極めなければならない。そこで、本研究はこの点の解明に全力を尽くした。その結果、母音融合とは母音同化のことであることを発見し、その分析方法として、現在一般に行われている制約による分析ではない、規則による分析法を提示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is clarify some specific features of vowel coalescence observed in norther Kyushu dialects as compared to standard Japanese. To attain this aim, however, we should first explore what vowel coalescence is and what analysis could be the most appropriate to explain it. In fact, I spent most of my time and energy to answer these questions. As a result, we foud out that vowel coalescence actually means vowel assimilation which is explainable by rule-based analysis instead of constraint-based analysis.

研究分野：人文学

キーワード：ソノリティー 母音融合 母音同化 北部九州方言

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究当初において日本語の母音融合は窪園(1999)において提案された母音融合規則によってすべて説明されたかに見えていた。しかし、詳しく調査するにしたがって窪園の分析にはたくさん問題があることがわかった。

(2) 北部九州方言においても標準語同様母音融合が盛んに行われていることはすでに文献等で明らかであったが、しかし、窪園が母一般性の高い音融合規則を提案したのは比較的最近のことなので、この規則がそのまま北部九州方言にも当てはまるのかどうかは不明のままであった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第1の目的は窪園(1999)が提示した母音融合規則の妥当性を検証することである。窪園(1999)の母音融合規則は空間的・時間的制限を受けない、すべての方言すべての時代に適用される規則であると考えられている。しかし、この規則には多くの例外が存在するが明らかになり、これに代わる分析の探求が求められるようになった。本研究では、このような分析の一つとして最適性理論を取り上げ、この理論のもとで母音融合の問題が解決できるかどうかを確かめることが次なる目的である。

(2) 本研究の第2の目標は、母音融合の宝庫とも言える九州北部方言において窪園(1999)の分析が適用されるかどうかをまず調査し、目的(1)で検証した内容の妥当性をさらに確かなものとするところである。そのうえで最適性理論による分析が果たして九州北部方言の母音融合現象を適切に説明できるかどうかを検討することが本研究の主たる目的の一つである。

3. 研究の方法

(1) 目的(1)を達成するために、まず標準語の母音融合現象を記した文献を収集し、その中ででてきたデータを隈なく窪園(1999)で提案された母音融合規則が対応可能かどうかを調査する。その結果、反例の数が多いとなれば、この規則は断念し、別の説明原理・方法を模索する。最も期待されるのは最適性理論による母音融合現象の分析であることから、とりあえずは、いくつかの文献に当たり、この理論の妥当性を調査する。次に、この理論でも満足のゆく結果が得られないとなれば、第3の新たな分析法の開発に取り組むことにする。

(2) 目的(2)を達成するためには、まず九州北部地方(福岡、大分、長崎、佐賀)の母音融合の実態調査を行う。そのためには、各県の方言辞典、方言の実地調査報告書、その他方言に関する学術図書などを丹念に調べ、必要があれば現地調査も行う。

4. 研究成果

(1) 窪園(1999)の問題点 1

窪園(1999)で提案された母音融合規則は以下のようなものであった。

[ɑhigh, δlow, εback] [çhigh, βlow, γback] → [ɑhigh, βlow, γback]

この規則はその適用範囲の広さ、形のシンプルさから、母音融合説明の最終手段として、これまでその妥当性が議論されたことはほとんどなかった。したがって、この規則に対する反論らしい反論も提示されることはなかった(小野(2001)、小野(2009)、小野(2018)を参照)。しかし、この規則には、i)明確な例外が存在すること、ii)融合形の二つのパターンを分類できないこと、iii)なぜ最初の母音の[high]と2番目の母音の[low, back]を融合させなければならないのかの原理的説明ができないこと、などの問題点があることがわかった。なかでも、i)の反例の存在は、上記の母音融合規則の修正あるいは破棄を求めるものであり、早急に対策が必要な事項であると考えられる。具体的には、[ie], [io], [ue], [uo], [oa]という母音連続にたいして母音融合規則はそれぞれ[i], [u], [i], [u], [a]という融合形を算出してしまうが、そのような融合形の出現は現在に至るまで確認されていない。これらの母音連続は最初の母音のソノリティーのほうが2番目の母音のソノリティーよりも低いという特徴をもち、このような特徴を有する母音連続を窪園の分析は扱えないことがわかった。このように、これまで何の問題もないと見做されていた窪園(1999)の分析が、実は、いくつかの重要な問題を含んでいるという点を指摘できたことが本研究の大きな成果の一つであると言える。ちなみに、窪園が対象にしたデータはいわゆる標準語が中心であり、ひょっとすると全国の方言を調べれば窪園の母音融合規則が予測する融合形が見つかるかもしれない。こういった点において今回の北部九州方言の調査は意義のあることと思われる。

(2) 窪園(1999)の問題点 2

母音融合の新たなデータを文献により見出したことも本研究の成果の一つと言える。稲田(2008)には以下のような例が記載されている。

[ie] → [e] noie (野家) → noe

[io] → [o] nisikiori (錦織) → nisikori

[ue] → [e] onoue (尾上) → onoe

[uo] → [o:] sizuoka (静岡) → sizo:ka

これらの例はいずれも第1母音のほうが第2母音よりもソノリティーが低い母音連続であり、窪園(1999)の提案する母音融合規則では誤った融合形を予測してしまう例である。

窪園(1999)ではこれらの例は記載されておらず、近年になるまで、これらの例の存在は明らかでなかった。

以下の例はその存在が以前から知られていたものであるが、母音融合規則との関連で議論されることはなかった例である。

[ia] → [a] kakiari (書きあり) kakeri

[ua] → [a] guamu (グアム) → gamu

これらの例に窪園(1999)の母音融合規則を適用すると [+high, +low, -back] という表示が与えられてしまう。ここでは [high] と [low] の両方の素性に対してプラスの値が与えられ、原理上このような素性をもつ母音は存在しない。日本語にも、もちろん英語にも存在しないのである。この二つの事例は窪園が提唱する「素性を用いた規則の表示」に限界があることを示す有効な事例と言える。このように、母音融合の説明に素性を用いることは適切でないことを立証できた点も本研究の成果として挙げるができる。

### (3) 最適性理論の問題点

素性を用いない分析の代案として最も有望視されるのが最適性理論による母音融合の分析である。しかし、上記でも述べたように窪園の分析の影響があまりにも大きすぎたために、最適性理論を用いて母音融合を分析しようとする試みはほとんどなされなかった。そのような状況で太田・氏平(2014)は例外的に最適性理論のもとで母音融合の説明に取り組んだ。本研究の成果として、このような太田・氏平(2014)の分析に対し、問題点を幾つか指摘した点にある。

太田・氏平(2014)では正しい出力形を導くために主として以下に示す二つの制約が提案されている。

#### a. TAKE LAST (TL)

V<sub>2</sub>の素性の指定を残す

#### b. ADJUST HIGH (AH):

- 1) V<sub>1</sub>V<sub>2</sub> がともに [±high] または [±low] で同指定のとき、一方を出力する。
- 2) それ以外は [- high][ - low]の母音/e/または/o/が出力となる。

これらの制約は実際母音融合の多くの例を説明できる。それらの中には窪園(1999)で問題になった [iel], [uel], [io], [uo] などのソノリティーが上昇するケースも含まれる。

しかし、太田・氏平(2014)の分析にも問題があることを本研究では指摘した。特に問題なのは真の反例の存在である。彼らの分析によれば、[ia]と[ua]という母音連続は以下に示すように[e]と[a]ではなく、両方とも[o]を出力形として算出してしまふ。この原因が上記のTLとAHにあることは言うまでもない。ここでは紙面の都合上[ua]のみ記す。

[ua] → [a]: guam → gamu

Input /ua/	AH	TL
a. u	*!	**
b. a	*!	
c. ⊗ e		***!
d. ☞ o		*

これら

の反例の他に本研究では以下に示すような三つの疑問を提起した。

(1) TLに関する疑問: 「V<sub>2</sub>の素性の指定を残す」と規定しているが、なぜV<sub>1</sub>ではなくV<sub>2</sub>の素性が残るのか。

(2) AH(1)に関する疑問: 高さの指定が同じとき、どちらか一方を出力する」と規定しているが、実際はTLによって第2母音優先的に選ばれる。なぜ高さが同じ場合に第2母音が出力形となるのか。

(3) AH(2)に関する疑問: 「二つの母音の高さが異なるときなぜ出力形は[-high, -low]([el]または[o])になる」と規定しているが、なぜ他の母音ではなく[e]と[o]なのか。

ここに挙げた三つの疑問は太田・氏平(2014)に対する疑問というよりも、最適性理論に基づくすべての分析に対する疑問と言ってもよい。つまり、この理論のもとでは制約と制約間のランキングを設定することが最も重要であり、その制約が何を意味するかは重要視されないのである。言い換えれば、制約は「～をしなければならない」ということは規定してくれるけれど、「なぜ～をしなければならないのか」については何も教えてくれない、ということである。以上のような理由から本研究では最適性理論に代わる第3の分析法を模索した。

### (4) 同化としての母音融合

本研究では、これまで「融合」と見なされてきた現象を「同化」という観点から見直した。上で見てきた例が「融合」ではなく「同化」であるという発想は、日本語の母音融合において第2母音出力形として選ばれているという事実に起因している。このことを踏まえて本研究では以下の同化仮説を提案した。

#### 同化仮説

母音融合とは第2母音から第1母音への調音位置 ([high], [low], [back])の(逆行)同化である。

この仮説により、[ae] [el], [oa] [a]などの融合はもちろんのこと、窪園(1999)で問題になった、ソノリティー上昇連続母音 [iel] [el], [uel] [el]も説明可能になる。また、言うまでもなく、この仮説は最適性理論の枠には当てはまらないので、(3)で見たような問題は生じ

ない。

この仮説には一見反例と思われる例([ei][e],[ou][o])が存在するが、これらの例に対しては「母音力」というものを定め、「母音力が大きすぎる場合には逆行同化ではなく順行同化が行われる」ということを発見した。

#### (5) 大分方言の母音融合について

研究題目が示すとおり本研究は元来北部九州方言における母音融合の実態解明がテーマであった。しかし、予想をはるかに上回りに母音融合そのものの研究に時間がかかり、方言の本格的な研究までには至らなかった。そのような状況のなか、北部九州方言に属する大分方言についてはある程度のことがかかった。もちろんここで使用するのは(4)で提案した同化仮説に基づく説明法である。以下に大分方言の母音融合についてわかったことをまとめる。

1)大分方言に現れる母音連続のプロセスは同化仮説によりほぼ説明できる。

2)大分方言では同化後しばしば渡り音[y]が挿入されるが、これはその前の子音の音声的特徴が影響している。

3)連続母音の第2母音が[e]に限ってその例が極端に少ない。

4)同化仮説ひいてはすべての分析の真の例外は[uo] > [u:]である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

小野浩司 他、開拓社、ことばを編む、査読有、2018、136-146

小野浩司、母音交替、佐賀大学教育学部研究論文集、査読無、1-2、2017、13-20

小野浩司 他、開拓社、現代音韻論の動向、査読有、2016、18-21

小野浩司、OCPと同化、佐賀大学文化教育学部研究論文集、査読無、20-1、2015、75-83

〔学会発表〕(計 2件)

小野浩司、日本語の母音融合について、東京音韻論研究会、2016

小野浩司、ソノリティーと音韻現象、秋田英語英文学会、2015

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小野 浩司 (ONO, Koji)

佐賀大学 教育学部・教授

研究者番号: 80177261

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号:

##### (4) 研究協力者

( )